

主体的改革の  
提言と実践①高大連携型入試の導入で  
トップリーダーを育成する

京都大学では、高校での幅広い学びや経験を評価する新しい入試制度について議論を重ねてきた。現在、各学部において具体的な入試方法に関する検討が進んでいる。入試改革は「大学改革実行プラン」の筆頭に掲げられているが、同大学の構想はプランの方向性とも一致する。現状に対する問題認識と改革のねらいについて、松本紘総長に聞いた。



京都大学総長  
**松本 紘**

まつもと ひろし

1965年京都大学工学部卒業。1973年工学博士。京都大学工学部助教授、生存圏研究所長、理事、副学長などを経て2008年10月総長就任、現在に至る。学外では、地球電磁気・地球惑星圏学会会長、国際電波科学連合会長、内閣府関係の委員等を歴任。

大学は「育人」を旨とし  
自鍛自恃の精神を涵養

大学で学ぶ20歳前後の若者は、30年先には日本を支える人材として活躍することになる。最低でも30年後の世界を想定し、日本を導いていく人材を育成することは、大学に課せられた最も重要な責務である。ただ、大人に近い大学生に対しては、教壇から一方的に知識を伝授するのではなく、激動する新しい時代に適応できる力を身に付けさせることが必要になる。

私は、大学の役割は、教えて育てる「教育」というより、「育人」、すなわち人を育むことにあると考えている。育人の基本は、自らを鍛え、他人に頼る前に、まずは自らを<sup>たの</sup>恃む姿勢を育むことである。この自鍛自恃<sup>じたんじじ</sup>の精神の涵養が大学に求められている。

翻って現在の若者の中には、恵まれた環境で幼少期を送り、国内でのささやかな成功を願う保護者の下、世界やアジア、日本全体のことを考えない者が増えている。大学が楽園化したと言われて久しいが、少なくとも大学生の何割かは、日本の厳しい現状をきちんと認識して、社会を率いるリーダーになってもらわなければならない。

リーダーとは、思想や知識を持ち、強烈な使命感に支えられて、周りの理解を得ながら改革を進めることのできる人を指す。リーダーの仕事は困難を極め、それを乗り越えることのできる忍

耐力も必要である。本学の務めはこうしたリーダーを育成することにある。

知識を含む幅広い体験が  
創造力の発揮につながる

大学の入学試験は、自鍛自恃の精神でリーダーになり得る人を選択する機会である。研究活動に耐えられる人、厳しい鍛練に耐えられる人を探る目的で実施されるが、学力試験では、どうしても研究能力にウエイトが置かれがちである。学術が科学を支え、科学が技術を支え、技術が産業を支え、各種の産業が国民生活を支えるという構造がある以上、大学において研究が非常に重要な要素であることは間違いない。しかし、研究能力も学力試験だけでは測りきれないのも確かである。

学力試験の科目数は限られている。合格を最終目標にするならば、受験科目だけを勉強するに限る。かつては、受験科目にかかわらず、高校ではあらゆる科目を学んでいた時代があったが、現在では、受験に必要な科目しか学ばないで入学してくる学生が増えている。しかし、特定科目しか勉強しなかった学生と、広く勉強してきた学生では、入学後の伸びが明らかに違う。それはなぜか。

大学では、研究活動に限らず、自ら新しい知見を開拓することを求められる。新しいことを行うには、創造力が必要であり、創造力を発揮するには、それを刺激する材料が必要である。その材料にあたるのが、幅広い知識や体験である。自分のあらゆる知識や体験を総動員し、それらを組み合わせで新しいことを作り出すのである。

知識や経験の重要性は、 $n$ 個の中から $m$ 個を選ぶ数学の組み合わせを考えれば明らかである。 $n$ が大きいくほど組み合わせが増える。例えば、 $m=2$

のとき、 $n=2$ なら1通りの組み合わせであるが、 $n=4$ なら6通り、 $n=8$ なら28通りとなる。つまり、知識や経験の積み重ねに努力すれば、組み合わせの母集団、すなわち創造力の源泉は飛躍的に大きくなるのだ。

創造力の差は、研究や人生の問題に対処する能力、引いては生命力、生活力、生存力につながると私は考えている。だからこそ、高校ではあらゆる科目をしっかりと勉強し、あらゆる体験を積んできてほしい。それを評価できる入試をきちんと構築できるかどうか、今後の大学の研究力を高めるうえでも、非常に重要なポイントになる。

高校と目標を共有し  
「幅広さ」を問う入試を

そこで考えたのが、特色入試の導入による入試改革である。入学試験は高校と大学のインターフェイスであり、その設計の仕方によっては、高校教育の充実につながる。高校生の知識や体験の拡大を促し、高校教育と大学教育をうまく接続することによって、未来を切り開く力を持ったリーダーを社会に送り出すことが可能になる。特色入試では、高校と意見を交換しながら、グローバル人材育成のためにより良い入試方法を採用したいと考えている。

詳細については、現在学内で検討を進めており、各学部からも具体的なアイデアを提案してもらっている。一般的には、特定分野で天才的な能力を有する人が輩出するより、幅広い知識と

資料 京大方式特色入試の検討に関するプレスリリース  
(2012年6月、一部を抜粋)

(前略) 高大接続の発展は、社会の各界からの要請が強い「国際展開を担えるグローバル人材」養成における太い幹である。幅広い豊かな教養力・俯瞰力、外国語運用力、優れた専門力を三位一体的に育成する上での基盤であり、国の人材育成上も極めて重要であると言えよう。(中略)

本学では、(平成18年以来)高等学校における幅広い学びと接続した入学試験制度のあり方について検討を重ねてきた。この度、総長諮問の入学試験検討タスクフォース等において、「高等学校における幅広い学習との接続及び受験者の志の喚起ならびに各学部のアドミッションポリシーとディプロマポリシーに則った京大方式特色入試の導入」に関して検討結果がまとまり、各学部においても、特色入試導入の可能性について検討が開始されつつある。

本学としては、国際化社会におけるグローバル人材の育成の要とも言える初等中等教育と大学教育との接続を契機に、入試改革をばねとした教育改革に今後とも取り組む所存である。

能力を持つ責任感の強いリーダーを育成するほうが、社会にとってプラスになると思う。だが、数は少なくとも異能の天才も必要で、入試方式の一部には特異な能力を評価するものがあってもよい。例えば国語や英語はだめだが、数学と物理はずば抜けているという生徒を入学させる方法もあり得る。

個人的には、高校で開設されている科目を満遍なく学び、課外活動やボランティア活動にも積極的に取り組んだ生徒を評価できる試験方法を工夫したい。文科系に進む学生にも数学の論理的思考力が必要なことを、われわれは経験的に知っているが、当事者である高校生にはわからない。そうであれば、幅広い学習や体験を強制する入試方式も必要ではないだろうか。ある程度の学力は必要だが、基本的なスタンスとしては、芸術に見向きもしないような“さもしい”高校生を大学が受け入れるべきではないと考えている。

大学入試が変われば高校が変わり、高校が変われば中学校も変わる。同時に大学教育も変わることになる。高校と連携しながら構築する本学の特色入試は、この波及効果という点でも、大きな意味を持つと期待している。(談)

日本の将来への危機感が  
入試改革の駆動力に

政財界をはじめとする各界からの大学に対する改革圧力が強まっている。日本の大学の世界ランキングが下がっていることを受けて、研究力を強化せよとの要請があるほか、大学生の学力低下や、社会人としての基本的な能力不足などの指摘を受け、教育改革の必要性も強く叫ばれている。

大学を統廃合すべきとの意見がある一方で、地方の大学こそ地域活性化の起点として活用すべきだという意見もある。こうした社会からのさまざまな要請を受けてまとまったのが、今回の「大学改革実行プラン」であると理解している。

一方、本学では、高大接続型の京大方式特色入試(以後、「特色入試」)の一部導入に向けた検討を行っている。同プランが掲げる最初のテーマ「大学教育の質的転換と大学入試改革」に合致したものになってはいるが、プラン策定を受けて着手した入試改革ではな

い。日本の将来に対する危機感を出発点として、人材育成機関である大学の責務を果たすために以前から構想していた方策が、ちょうど時を同じくして具現化したものである。

この危機感は、若者を何とかしなければ、将来、日本国民の利益を確保できないかもしれないという切実な懸念に根ざしている。現在の日本は、確かに豊かではあるが、その豊かさは非常に脆弱である。国の借金1000兆円を超えようとしており、このままいけば破綻を免れないという状況下での、虚構の豊かさである。

世界の人口はすでに70億人を突破し、発展途上国が日本と同じような豊かさを求め始めれば、資源の確保を巡って世界中で紛争や戦争さえも起こる可能性がある。世界がそういう情勢にあるにもかかわらず、日本の若者は、見かけの豊かさの中で、生命力、生活力、生存力を失いつつある。この状況を何とかしなければならない。これが、本学を入試改革に向かわせる最も大きな駆動力である。